

てんぐでんせつ 天狗伝説コース

天狗の伝説に触れ、季節の山里の表情をゆっくり味わおう



歩いて、未病を改善!
神奈川県・県西地域ウォーキング 南足柄市 No.20

「#県西ウォーキング」でSNSに
写真や感想をアップしよう♪



アクセス

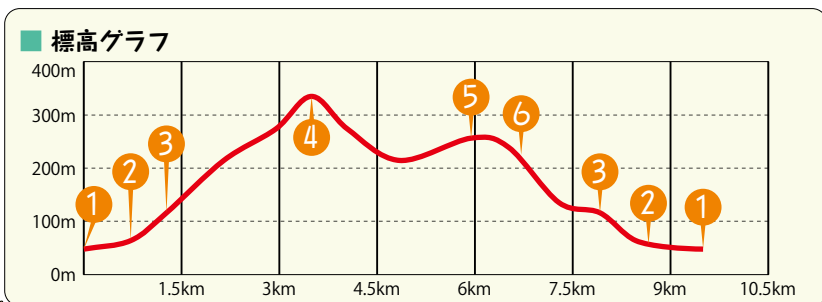
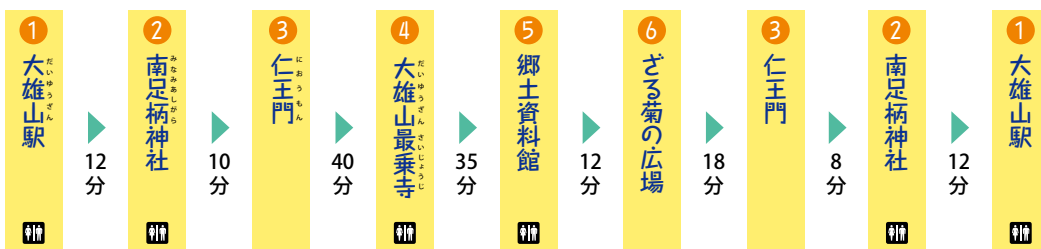
- S スタート** 伊豆箱根鉄道大雄山線「大雄山駅」
- G ゴール** 伊豆箱根鉄道大雄山線「大雄山駅」

※コース詳細は南足柄市ホームページをご参照ください。
<https://www.city.minamishigara.kanagawa.jp/kankou/>

歩行距離	歩行時間	消費カロリー
9.5km	2時間27分	512kcal
高低差	歩数	
226.8m	12,379歩	

コースの魅力

【花木】桜(3月~4月)、あじさい(6月頃)、ざる菊(10月下旬~11月下旬) 【景観】最乗寺の杉並木 【歴史】最乗寺多宝塔(市指定文化財)、松平大和守直基の墓
【★選】最乗寺杉並木(かながわの美林50選/かながわの景勝50選) 【温泉】モダン湯治 おんりーゆー



コースの概要

大雄山駅からスタートして、「南足柄神社」や「大雄山最乗寺」といった由緒正しい神社仏閣に立ち寄り、季節の花の道を歩き、大雄山駅に再び戻るコース。春は桜、初夏はあじさい、秋にはざる菊など、四季折々の花を愛でながら歩く楽しみがあります。最乗寺は杉並木も見事で、是非時間をとって訪ねたい場所。歩き疲れたら、日帰り温泉にひと足のばしてみてはいかが?

ざる菊のおもてなし



花咲く里山
大雄町「花咲く里山」では美しい里山風景を守っています。毎年10月下旬~11月下旬に代表的なイベント「ざる菊まつり」が開かれます。地場野菜などの販売もあり賑わいます。

「ぬるゆ」でゆったりと長湯を楽しむ

モダン湯治 おんりーゆー

からだに最も良いと言われている38℃の「ぬるゆ」で長湯がおすすめ。広葉樹に囲まれた開放感あふれる景観や沢の瀬音を楽しみながら、ゆったりと過ごせます。



【住】南足柄市広町1520-1 【電】0465-72-1126【営】10:00~20:00
【入】ホームページまたはお電話で最新情報をご確認ください。
【休】不定休 【HP】<https://www.ashigara-only-you.com>

※歩行距離と歩行時間は、南足柄市のデータを参照。 ※高低差、標高グラフは、国土地理院の地図データを参照。消費カロリー、歩数は、「成人男性:身長170cm、体重68kg」をモデルに計算。(元となる標高データの精度や計算方法による誤差が含まれています)。 ※各数値は、あくまで目安であり、年齢や体格、歩くスピードなどにより大きく変わることがあります。 ※掲載情報は、令和6年2月現在のものです。



ウォーキング MAP

- ルールとアドバイス**
- 1 ゴミは必ず持ち帰りましょう
 - 2 植物・鳥・動物・虫などの採取・捕獲は絶対にやめましょう
 - 3 自分に合った歩きやすい靴をはきましょ
 - 4 水分の補給をこまめにましょ



3 仁王門
 大雄山最乗寺の参道の3丁目に位置し、お寺を守るために作られた朱色の門「東海法窟」の額と「最乗寺専門僧堂」の聯が掲げてあり、阿吽の金剛力士像が安置されています。神奈川県天然記念物に指定されている3kmもの杉並木が参拝者を迎えます。



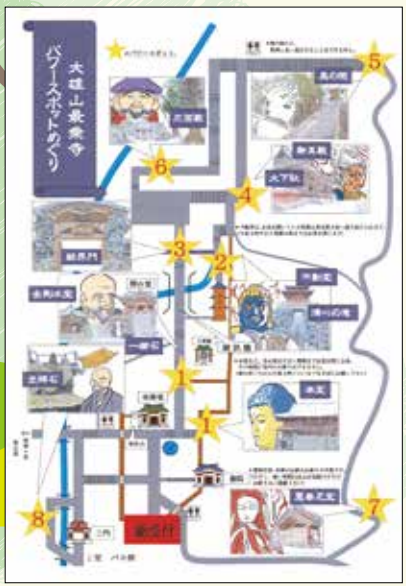
ジオサイトって？
 箱根火山を中心とした地域の自然や歴史、文化、食などを大地とのつながりで楽しむ「箱根ジオパーク」の見どころです。



4 大雄山最乗寺
 福井県の永平寺、鶴見の総持寺に次ぐ格式のある曹洞宗のお寺です。創建に貢献した道了という僧が、寺の完成と同時に天狗になり身を山中に隠したと伝えられることから、道了尊とも呼ばれています。



参道約3kmには樹齢500年以上の杉並木(県天然記念物)がうっそうと茂っています。



豊かな自然に癒されながら「最乗寺」を歩こう

「最乗寺」は、参拝や修行の場としてだけではなく、パワースポットとしても知られています。豊かな森の天然フィルターが澄み切った空気を満たし、可憐な野花が広い境内を彩ります。

世界一の大下駄に驚きながら、境界門から317段を上りきると、大雄山の最も高い場所にある奥の院にたどり着きます。歩きながら癒される、何度でも訪れたいスポットです。



シャガ
 青いカタバミ草

最乗寺の意外な魅力～美術品

あまり知られていませんが、実は最乗寺にはたくさんの「お宝」が集められています。宝物殿には、かつて寄付などで集められた貴重な美術品・芸術品が所蔵され、参拝者に無料で展示されています。展示品は不定期に入れ替わるので、どの作品に出会えるかは訪れてみてのお楽しみ。



佐藤大寛「富嶽之図」